

## Café des open



## 三浦一族

Menu 第18回  
三浦一族ゆかりの  
遺跡と文化財①

文／磯口健太郎（横須賀市教育委員会 生涯学習課）

今回と次回の「Café des 三浦一族」では、三浦一族ゆかりの遺跡と文化財を紹介します。

三浦一族の本貫地である大矢部の谷の支谷の一つに、南北350㍍に及び「深谷」と呼ばれる谷があります。この深谷の最奥部を占めるのが「円通寺跡」と「深谷やぐら群」の二つの遺跡です。一帯は昭和14年（1939）に海軍が買収し、戦後も自衛隊が弾薬庫として使用してきました。そのため一般人の立ち入りは制限されてきましたが、このたび弾薬庫としての役割を終えました。横須賀市は弾薬庫跡地を取得する方針を示し、取得後の土地活用検討の一環として、遺跡の分布と現状確認の調査を令和4年12月に実施しました。

三浦氏初代為通の開基と伝わる円通寺は、この連載の第三回で紹介された『大矢部村絵図』のほか、江戸時代後期の地誌類に草葺一堂が描かれています。この頃には既に衰退していたと見られ、間もなく廃寺となりました。近世以前の円通寺の様相は全く不明ですが、本尊は現在清雲寺の本尊となっている滝見観音であったといわれています。滝見観音はその様式・技法などから中国の南宋時代に江南地方で作られ、当時全盛期を迎えていた三浦一族の請来により大矢部にもたらされたと考えられています。

この円通寺の背後の谷の斜面にあるのが深谷やぐら群です。やぐらとは岩盤の斜面に横穴を掘り、お墓、供養堂としたものです。やぐらの中には五輪塔などが置かれ、床には焼骨を埋納するための穴が掘られることもあります。焼骨は直接もしくは骨壺に入れて埋納されるほか、五輪塔などに納める例も見られます。やぐらは鎌倉時代の中頃から室町時代にかけて、鎌倉周辺及び鎌倉の文化的影響を強く受けた土地で盛んに作られます。市内ではこの衣笠・大矢部地域のほか追浜・浦郷地域に集中して見られ、他の地域ではあまり見られません。

深谷やぐら群は江戸時代には19穴の存在が知られ、昭和14年に海軍が買収する際には故・赤星直忠氏立会いのもと、五輪塔などを清雲寺に移しています。やぐら群の最上部にあり最大規模を誇る1号穴は、内部に三浦氏初代の為通、三代の義継のもとと伝わる五輪塔が祀られていましたが、現在はともに清雲寺に移されています。また、1号穴の入り口の手前には市内最大級の板碑が建てられており、同じく清雲寺へ移されました。板碑とは石で作られた卒塔婆で、この板碑には文永8年（1271）に三浦一族の一人である佐原盛信が造立した旨が刻まれており、市内では数少ない鎌倉時代の紀年銘資料であることに加え、やぐら群の造営に関わったとみられる個人が特定される重要な資料です。

このように、深谷は歴代三浦一族にまつわる文化財が数多く存在し、重要な土地であったことが伺えます。次回は令和4年度に行った遺跡分布調査の様子についてご紹介したいと思います。それでは皆さま、よい年をお迎えください。



深谷やぐら群 1号穴の入口